

八戸市立図書館所蔵「盛岡御城江御立寄并聖寿寺御仏詣一件」

高橋 博

【解題】

家臣野村武一（軍記）を登用し、文政の藩政改革を推進したことで知られる陸奥八戸藩主南部信真は、安永七年（一七七八）六代藩主信依の四男として江戸で誕生し、寛政七年（一七九五）兄である七代藩主信房の養子となり、同八年襲封、八代藩主となった。同年従五位下左衛門に叙任し、同九年初めて八戸に入部した。天保十三年（一八四二）致仕し、弘化三年（一八四六）六十九歳で死去した。^①

本史料は、この信真が文化五年（一八〇八）十月、宗家盛岡南部家の菩提寺聖寿禅寺を参詣した時の顛末を記したものである。本文墨付二十一丁から成り、記主は定かではないが、内容から見て、信真に随行した家臣の中の一人であることは間違いない。五丁裏の途中までは、十月一日、盛岡藩領の沼宮内村に止宿した信真一行を盛岡藩主南部利用（大膳大夫）の使者白石環が訪れ、信真の家臣野村武一と対面し、翌日信真一行が盛岡城に入城するに当たり、下乗の場所、盛岡藩家臣の出迎え、利用と信真の対面、饗応などに関する作法の取り決めが内々になされていることが記されている。五丁裏の途中から十四丁裏までは、十月二日、

盛岡藩が信真の宿泊のために用意した城下六日町の仮屋において、先着の信真の家臣金田一作兵衛と盛岡藩の佐藤靱負との間で行われた、信真への献上馬や盛岡城内における諸儀式の最終的な打ち合わせが記されている。ついで、実際の利用と信真の対面、夕膳における饗応の様子、そしてこれらが全て済み、十月三日、信真の一行が帰路に向かったことなどが記されている。十五丁表から二十一丁裏までは、聖寿禅寺における仏詣の次第が絵図入りで記されている。また寛政十一年・文化二年・同四年の三回、信真による同様の仏詣が行われていたことが記され、信真の襲封後、この行事は不定期ながら続けられていたことが窺われる。

以上が本史料の主な内容である。信真は八戸初入部の翌年の寛政十年一月十六日、年始の社参・仏参のため、供の者を連れて法霊社・櫛引八幡宮・長者山新羅神社・神明宮・南宗寺を訪れ、その後も年始の社参・仏詣は続けられた。^② 年始のほか、盆の仏詣、歴代藩主の法要などのため南宗寺を訪れ、また家臣を代参させている。^③ 信真の聖寿禅寺仏詣は八戸藩の公式記録である「八戸藩日記」「八戸藩勘定所日記」などへの記載がなく、その目的については明らかではないが、この時期盛岡藩主も社詣のため八戸領内を訪れることがあった。「八戸藩勘定所日記」の文化

二年八月晦日条には、^⑤

一、大膳太夫様御内々御忍二而八幡江御参拝御通行二付、三戸止宿之義前広彼方江頼置今御止宿と申義為知呉候様右為知有之候ハ、從奴吉村直々以飛脚申出候様御沙汰二付、御代官嵯峨志津磨江申置、

(下略)

とあり、藩主南部利用(大膳大夫)が「御内々御忍」にて櫛引八幡宮を参詣したことが記されている。したがって、信真の聖寿禅寺仏詣も同様藩の公式行事ではない「御内々御忍」によるもので、「八戸藩日記」などの藩の公式記録に残らない事柄であったと考えられるのである。

周知のように、寛文四年(一六六四)嗣子を定めぬまま死去した盛岡藩主南部重直の遺領十万石は、重直の二人の弟の重直と直房に分割され、重直は八万石を相続し盛岡藩主、直房は二万石を相続し初代八戸藩主となった。同八年の直房の死去は、八戸藩の新設を不満とする盛岡藩からの刺客による暗殺の噂が立つなど、当初の両藩の関係は好ましいものではなかった。それから約一世紀半、化政期に至り、盛岡藩と八戸藩とは、こうして互いの藩主が共有する先祖の菩提を弔うため、秘密裡ながら行き来するまでの間柄になっていた。その上で、本史料は両藩の関係を考える上で興味深い。

註

(1)『新訂 寛政重修諸家譜』第四卷(続群書類従完成会、一九六六年)、木村礎他編『藩史大事典』第一卷(雄山閣、一九八八年)。

(2) 聖寿禅寺は臨済宗、山号は大光山、本尊は釈迦如来。もと三戸にあつたが、寛永年間に盛岡の北山に移り、寺領五百石。盛岡五山の寺格を有した。近世においては、三代重直・四代重信・五代行信・七代利幹・八代利親・九代利雄・十一代利敬・十二代利用(利用は二人いて先に没した方)・十三代利済の墓がある(『角川日本地名大辞典 三 岩手県』角川書店、一九八五年)。

(3) 沼宮内村は沼宮内通に属し、盛岡城より約八里北にあり、奥州街道が村の西辺を縦貫し、代官所・御蔵が置かれた(前掲『角川日本地名大辞典 三 岩手県』)。

(4) 「八戸藩日記」同目条『八戸市史』史料編九 近世七、八戸市史編さん委員会編、一九七九年、四八一頁)。なお、法霊社は八戸城二の丸にあり、城の館神として祀られていたと考えられている(現、おがみ龍神社)。

櫛引八幡宮は南部氏の氏神・盛岡藩の総鎮守で、奥州二宮または南部一宮と呼ばれた。八戸城の南西に位置し、当社のある八幡村は八戸藩領内にとり囲まれた盛岡藩の飛地となっている。長者山新羅神社は、三杜堂などと称し、神明宮と共に八戸藩の重要な祈願所である。南宗寺は八戸藩南部氏の菩提寺で、臨済宗。長者山新羅神社・神明宮と共に八戸城南方の長者山周辺に位置した(『角川日本地名大辞典 二 青森県』角川書店、一九八五年)。その他、南宗寺については藤田俊雄「八戸藩南部家墓所について(一)」「(二)」(『国史研究』(弘前大学) 八八・八九、一九九〇年) 参照。

(5) 「八戸藩日記」寛政十二年一月十六日条(『八戸市史』史料編九 近世七、五三〇頁) ほか。

- (6) 「八戸藩日記」寛政十一年七月十四日条(『八戸市史』史料編九 近世七、五一六～五一七頁)。
- (7) 「八戸藩日記」寛政十一年八月九日条には、来る十三日の龍津院(故五代藩主南部信興)二十七日忌の法事のための御用掛任命が記されている(『八戸市史』史料編九 近世七、五二〇頁)。
- (8) 「八戸藩日記」寛政十年一月七日条(『八戸市史』史料編九 近世七、四八〇頁)。
- (9) 『八戸市史』史料編十 近世八(八戸市史編さん委員会編、一九八〇年、四九頁)。

【凡例】

一、本史料は、八戸市立図書館所蔵「盛岡御城江御立寄并聖寿寺御仏詣一件」(青 五―七三 一冊 写本)の翻刻である。

- 一、翻刻に際し、読解の便をはかるため、次のような校訂方針を採った。
- 1 文中に読点・並列点を便宜加えた。
 - 2 底本の文字や文章の加除訂正は、訂正された結果のみを記すのを原則とした。
 - 3 底本にある平出・闕字は行わなかった。
 - 4 漢字は原則として常用漢字を用いたが、略体字の(より)は通用の字体に改めなかった。
 - 5 当て字・誤字などは、そのままとした。
 - 6 校訂注は、底本の文字に関するものは「〔 〕」、参考又は説明のため

めのものは()で括った。

7 底本の丁替りは、各丁表裏の終りに「を付して示し、その表裏の始めに当たる部分の行頭に、丁付け及び表裏を(1オ)(1ウ)の如く示した。

【翻刻】

(原表紙)

盛岡御城江御立寄并
聖寿寺御仏詣一件

(二二・二cm×一六・七cm)

(1才) 信真公御止宿之節初而大膳大夫様江御立寄始末一件并聖壽寺御仏詣之節勤方、

(1ウ) (墨付ナシ)

(2才) 盛岡御止宿之節大膳大夫様江御立寄始末一件

(南部利敬)

一、御発駕前御立寄之儀被仰進置候処、十月朔日沼久内御止宿江従大膳大夫様御側使者白石環罷越、御取次野村武一罷出候処、御旅中御見舞之御口上被仰進、御直書御壱封被進、随而被遊御逢候ハ、大膳大夫様御直被仰付候趣申上候筋も有之、且当役江も申出候趣有之段申聞候旨武一申出、右之趣当役及言上、

一、御逢前当役出逢候所、明日就御立寄何角御手筈之所御申談候様御用
(2ウ) 人中被申付候趣申出ケ条二而申聞、外二御下乗」之場所絵図并大膳大夫様御直二被仰付候御ケ条書御逢之節直二差上候様被仰付候得共、為内見右両様差出、右二而内々向合等有之、一先両様共二願置御内々入御覽御内慮茂相伺、御下乗場も被仰進候趣可然申談候得共、内々御目付并御刀并番小道具頭江も為談候処、何連も宜趣申出其旨達御聴候処、御内定之趣被仰出、其外御ケ条書之次第共内談之上申上置、環呼出御内分之御使故御刀番武一先立二而被遊御逢候趣申達、直二被遊御逢、尤右絵図面并ケ条書共二御逢前二環江相返ス、

一、盛岡御用人書中を以御立寄二付、御下乗之場其外共二御差図を以
(3才) 御先代」御進候、委細環申出候趣申来、挨拶相応申遣ス、

一、白石環持参差上候ケ条書左之通、尤御挨拶候趣共二記置、

覺、

一、一先六日町御飯屋江御着、以後御出被進候様申上候事、

右之思召二而被為入候事、

一、御着服御上下被為召候哉、御旅中之御事故御かるさん二而可被為入候哉之事、

右御上下二而被為入候事、

一、御料理被進候思召二被為候事、

右御承知之事、

(3ウ)

一、御料理御断二御座候得者、御梔盛御菓子」被進候事、

右前段之通御料理之思召御任被進候事、

一、御盃事可被成哉之事、

右御盃事被遊候事、

一、御城内之儀故、御供方夫々被差置候御場所も無之、何角御籠末儀も可有御座候哉と、是等之儀も申上候事、

右被入御念候御事思召候、

(南部信實)

一、左衛門尉様御城江被為入候節、御中丸御玄関鏡板迄御家門方御出逢被成、御敷出江御家老・御用人罷出、其外御敷出外レ御取次・御者

頭・御目付・御使番罷出、御用人迄者御鋪出外レ不申候、右者大

(4才) 膳大夫様御出御座候節願而右御振合御座候間、旁」御籠略之御取扱と被召置候儀も可有御座候哉二付、此段茂申上置候事、

右被入御念候儀思召候、

一、車御門御入被成候得者、切石脇江御者頭罷出候事、

一、御中丸御番頭并同御番人罷出候事、

一、御中丸二而御対顔被成候儀御座候へ共、御親ミ之義思召御表御用

人御先立申上、直二御側二御着座被成、同断御対顔被成候、尤御玄
関 御入被成候得者、御賄 御続申上、御家門方并御家老御用人御本
丸江相詰候事、

右何連も御承知被成候事、

- 一、前々御先代様方被成御出候節者、御勘定所前江御道具等被差置、車
(4) 御門外二而「御下乗被成候、右車御門者江戸御屋敷二御座候へ者、
別表御門二御座候、此度ハ右之通二者不被成候、御親敷被成候所
車御門内へ御入被成候而御下乗被遊、右二御准御道具等も被差置候
御場所前々と違御引上被成候、委細之儀者御飯屋詰御役人御談可申
候得共、是等之趣も御内々入御聴置候様被仰付候、

右被入御念候御事御承知思召候、

九月廿九日、

- 一、白石環当役江向合二付、左之通挨拶申遣、
一、御飯屋江一先御着、夫 被為入御事、
一、夕御膳御城二而被進候趣被成御承知候事、右二付御飯屋二而御馳走
御断可被成候事、

(5才)

- 一、御供立之儀者御先鍵 以下被召連候事、右之人数者士分十六・七人、
下二五十人位之事、

- 一、白石環江遠路大儀思召御目録式百疋被成下、当役申達、右御請并御
逢之上御意之御請共申出御返書も被進、随而下宿直二出立之旨申聞
候間、御飯屋二而何角御談合も有之輩、当役并御目付共二無程出立
罷越候間、御飯屋詰之御方右之御心得二而畢様御詰被下候様頼遣ス、

- 一、明日大膳大夫様江御立寄二付、御飯屋二而諸事申談も有之輩、当役
作兵衛・御目付七戸惣右衛門・御徒目付立花半之助沼久内夜九時
(5) 出立、尤作兵衛儀洪民」御立二而御機嫌茂相伺不申、直二盛岡江罷
越候節相伺出立、

- 一、沼久内夜八時半頃被遊御発駕、

十月二日、

- 一、作兵衛儀盛岡江九時頃御着、直二宿先立二而御飯屋江相詰、
一、御飯屋詰御用人佐藤頼負江出逢、定例之趣申向候上、此度御立寄二
付左之通断書ヲ以申談、先方挨拶共記置、
覚、

- 一、御出前当役御使者三種一荷被進候事、外御側使二而御出座之品被進
候事、

右御承知之由、

- 一、御迎人被進候御模様二も御座候哉之事、
(6才) 右者以前者御迎被進候得共、御下向と違」御雇等も此方江御雇御
座候へ者、御手人御同様思召候間、此度ハ御迎不被進候趣挨拶有之、
一、当役御使者相勤済候ハ、直二相詰居候様被成度旨被仰付置候事、

右二承処之趣御城江も申遣置候趣、

- 一、御道案内之者可被仰付候哉、且中橋御廻二も御座候哉、

右御道案内も被差出、中橋御廻之趣挨拶、

- 一、御下乗場御先代車御門二而被遊御下乗候趣、此度ハ江戸表二而仰合
も有之候間敷可有御座候哉、

但、右迄御先供・御牽馬共入候事、

(6ウ) 右者昨夜沼久内御止宿迄御内分」被仰進御承知二而相濟候旨申向候事、

一、御無心之御馬者御出前二も御覽相成候様致度候事、

但、御仮屋御次之庭二而此方御馬役取扱入御覽申度候事、

右者此方二而も右之心得二而罷在候、随而御馬者月毛・青毛両疋入御覽候、尤月毛者両度江戸表江為御牽被成候処、物おちも無之下馬立共二宣為向御召替之趣、青毛之方も宜躰候得共、江戸表江一度も為御牽無之而御安堵無之、併何連二而茂御迎方御極被成候様致度毛付之書付共二被差出候、御覽次第共二」申向候通可

(7才) 然挨拶有之、

一、左近様御上御対顔御盃事等も可有御座候哉之事、

右御盃事も可被成由、御城江も被申越候由、

一、大膳大夫様御盃等も可有御座候哉之事、

右者昨夜沼久内江被仰遣相濟候旨申向候、

一、御供婦無之御間取無之様被成度思召候事、

右者御城江も可申越候間二而、御間取無之様可被成思召之事、

一、御城内御番所御役人詰も御座候哉之事、

右昨夜被仰進相濟候旨申向候、

一、御帰後御使者御刀番 被進候事、

(7ウ) 右承知之趣御城江も被申越候也、

月日、

一、右断書之ヶ条申談候後、左之趣鞆負被申向候事、

一、御城内二而夕御膳被進候趣、昨夜御止宿江被仰進候而御挨拶も相濟

候間、御仮屋二而御馳走御断被進候旨申向候事、

一、詰御役人中江御出前御逢被成候而者、御間取二も可被成候間、御帰後之御逢致度旨申向候処、右二而可然趣挨拶有之、依而御家老中共

二御帰後御上可然候段、是又申向ル、

一、御城江被為入候節、御道具被差置候場所并御下乗之場所諸事御町奉行渡辺平馬掛被仰付置候処、未御目付中も御詰無之趣、彼是御間取(8才)可申候間、各様江」直二御談合申候様可申達哉之旨鞆負被申候間、無程御目付共も相詰可申候得共、御間取二も相成候ハ、右二而も宜敷旨及挨拶、

一、右之次第申談相濟、詰所江引取候処、此方御目付も相詰候二付、渡

辺平馬 御下乗之場所并御道具等被差置場所絵図面差出、御先々代諸事御進被成候趣申聞、随而御下乗者車御門雨落二而御宜趣、右御進被成候へ者、御玄関江御家門方も御出迎二而直二御見通相成、乍少義御無放二も相成候間、呉々も御進無之様被成度之旨平馬申聞候段、御目付七戸惣右衛門申出候間、何も可然以御席可申上置旨及挨拶候申達之、

(8ウ)

一、右絵図面之御場所御出前其御役方被遣、内見被仰置可然旨平馬申聞候旨御目付申出、右之通取斗候様申達、随而小道具頭小平徳右衛門差遣候段申出承置、

一、御仮屋江八時過御着座御出迎等例之通之事、

一、御着前向方御用人江諸事申談之趣、御心得相成候ヶ条達御聴置候事、

一、御供廻支度相濟候ハ、直二被為入候趣被仰出面々江申達、御前江

も御小弁当差上候事、

一、御無心之御馬御覽之儀相伺御用人詰所江直罷越、唯今御馬両疋被成御請候趣申述、随而先刻御申合之通其方御馬役 此方馬役江為御渡

(9才)被^レ成候様致度申向置、右之段堀野源三郎江申達為請取、

御座之間御庭ニ而左之通入御覽、

一、月毛 七才、

一、水青星 六才、

一、右御覽相濟月毛七才御無心可被成旨被仰出、右之趣軼負詰所江直罷越申述、随而面々江も御達置可被下旨申向候所、直ニ毛付書付同人より差出左之通、

覺、

月毛 七才・四寸五分 寿

以上、

十月、

(9ウ)

一、右御馬聞取方堀野源三郎江申達候処、早速請取方相濟候段申出、尤兼而申来候通、馬衣一通ニ而被進乗合ハおろし之趣申出、右之通達御聴、毛付書付共ニ入御覽候、

一、右御馬江御馬役似鳥軍平并小頭耆人・御付四人杳籠持耆人付添参ニ付、小頭江鳥目三十疋、平五人江鳥目七十疋・御酒代被成下、源三郎ヲ以申達之、

一、御馬役江被下方手筋面倒ニ付、此方御目付 詰合之御目付江相願、金百疋被成下、御請申出、

一、小平徳右衛門より御城江内見罷越候処、御徒目付山口伝左衛門罷出、内見為致候段、御目付 申出ル、

(10才)

一、御出前御側使者御刀番波伯部清之助ヲ以御出座之品左之通被進、

一、交御着 一折、

一、鴨 二羽、

右何連も八戸 御持参也、

一、御出前当役作兵衛御使者ニ而御樽代三百疋・御肴一折此度初而被為入候ニ付被進、上下八人・御馬共ニ外御進、宰領耆人持人共召連登城、且夜入候得者、右外ニ桃灯持耆人遣候様申付置候事、

一、作兵衛登城御取次箱崎助右衛門出迎、柳之間江着座御用人中江出逢申度助右衛門江申向候処、小向四郎兵衛被罷出御口上申述、御目錄(10ウ)之通被進候旨是又申述、右畢而助右衛門ヲ以御用人中江 出逢申度申入候処、役所江通候様申来、助右衛門案内ニ而罷通相応及挨拶随而御帰迄詰居候様被仰付候趣申候而、且被為入候節御玄関江罷出可申候哉向合候処、右二者及申間敷旨挨拶有之相応答相濟御別間江引取居可申旨申聞候処不苦候間、是ニ詰居候様被申聞、御用人所ニ御帰迄詰居、

一、右御返答池田左内申聞、御逢御直答可被成候処、御取込ニ而御逢被成兼候趣御断有之、

一、七半時過御供揃ニ而被為入、御供立者対御鑓 以下被召連、御駕籠脇八人・御先供八人左之通、

(11才)

一、御刀番、野村武一

一、御納戸御刀番兼、渕沢庄右衛門、

右兩人者羽織踏込二而、

一、御近習、石井辰右衛門、

松越後守、

一、御番士、郡司光之進、

堀野源三郎、

一、小道具頭、小平徳右衛門、

一、常御供、三田源五兵衛、

一、御先供、八人、

右何れも旅装束、

一、御飯屋・中橋迄御先・弘御足輕兩人出、中橋御徒上下着用二而御先

(11才)立車御門前切石下二而下着付、

一、綱御門前腰掛二而中押以下八下座付、

一、鳩御門前馬収庫江御牽馬差置、

一、車御門前切石二而御持鍵御持添御賄箱御先立御徒向合下座付、

一、車御門内雨落江御駕籠先棒すり通二付被遊、御下乗此所江御徒目付

山口伝左衛門詰居、

一、御城内二而御駕籠戸引候儀者下座請等不致、御下乗後車御門内御番

所詰之御者頭兩人下座有之、御出御帰共二御番士常御供之内名披

露、

一、御玄関并御式台江御家門方左近様・主計様・歌之助様御出迎、其外

(12才)御家老以下御使番迄下座台切石際まで罷出、但御出御帰共二、

一、御本丸御座台江御着座被遊、御対顔御時宜合御相応御挨拶御家門方

共二御同様相濟、御膳二汁五菜御料理被進、御家門方御相伴、

但、

一、右畢而御吸物御酒被進、此節者大膳大夫様御相伴此処二而御家門方

迄御盃事有之、

一、御家老始八戸弥六郎御用人迄被成御逢候事、

一、紋織疋大膳大夫様御城二而被進候事、

一、作兵衛江御使者相勤候二付、御目錄銀疋枚御用人を以池田左内被成

(12才)下、随而引二・三菜御料理并御干菓子被成下、御用人所二而頂戴

之、

一、池田左内作兵衛江申聞候者、左近殿御事御飯屋江御見廻被進度候趣

之处、近年御病身二而御湯治も被成候得共、未暁と御快方二も無之、

其上年來御見舞も無之候得共、諸事御会釈も暁と相分兼、旁以此度

御見舞被進候儀、御家老中御扣之儀と申上候間、右之趣御席之節被

仰上置候様被致度旨御家老中被申聞候間、御席之節可申上旨挨拶御

帰後達御聴置、

一、御簾下御刀番兩人江御吸物御肴三種、御駕籠脇御先供迄御吸物御肴

(13才)二種二而御酒被成下、尤御刀番一間御駕籠脇脇常御供迄一間御先供

一間二而被成下、右外惣御供下々江者御赤飯紙包水引詰二而一統江

被成下、

一、夜四時頃御機嫌能被遊御帰、此節大膳大夫様余程御送被成候趣、其

外御送御出之節之通、

一、御帰後作兵衛儀頂戴物之御請詰合御用人江申出、其外相応及挨拶引

取、

一、此度初而被為入、御饗応之上御到来物御礼惣御供廻江支度被下候、御挨拶御使者御刀番野村武一ヲ以被仰進、

一、大膳大夫様 御帰御見舞御側使被進候処、御支ニ而御直答無之、以御側御返答被仰進、

(13ウ)

一、右御答礼之御側使被進候儀詰合御^レ用人為知候処、彼は源大夫ニも相成候而、御双方御取込之事故進候^レ躰ニも取斗可申候旨報負申聞候間、伺其迄宜願候趣申向置、

一、御飯屋詰御用人始御役人当役詰所江被罷出、御帰御機嫌被相伺、何之御障不被為候趣申述、御席ヲ以可申上旨挨拶申達、右之趣及言上、

一、当役并此方御役人御帰御機嫌相伺、是又及言上、

一、御帰後御家老毛之内藏人伺御機嫌罷上、外二八戸弥六郎・新渡戸丹波自分伺御機嫌罷上、其外詰合御役人迄例之通、御逢被下物等有之定例之分別卷有之、略之、

(14才)

一、前段御出御帰之節、当役御先立御飯屋詰御用人・御町奉行・御目付御玄関江罷出、御者頭者御飯屋御門前江罷出、此方御目付共御玄関江罷出、

十月三日、

一、左近様於富様 御見立之御使者、且左近様 昨日初而御対顔之御挨拶之御口上共ニ被仰進、達御聴御返答例之通、御立掛御直答、

一、朝六半時益御機嫌能、盛岡被遊御発駕、御供作兵衛、

右之通諸事無御滞相濟、尤御定例之ヶ条者別帳ニ有之、除之、

(14ウ)

文化五年辰十月、

御供御用人、

加藤通、

金田一作兵衛、

(15才)

盛岡聖寿寺江御仏之節御用人勤方一件、

聖寿寺御仏詣之節、

(15ウ)

(墨付ナシ)

(16才)

一、盛岡聖寿江、御仏詣之節御用人勤方一件、聖寿寺江御仏詣之次第、

一、当役老人御先詰宿之者案内ニ而聖寿寺江旅装束俣ニ而若党兩人草履取召包、駕籠ニ而罷越下馬ニ而下乗致候事、

但、文化四卯年鑓具足・御馬共ニ為持候事、附、下馬二者腰掛等有之所也、

一、御寺江者中ノ口ニ而刀を為持置罷通、左衛門尉様御先詰之者ニ而有之旨申断、出家先立ニ而相通候事、

(16ウ)

一、御先詰御刀番御納戸老人宛罷越、同所 罷通、何茂刀者持參詰所江罷越、

但、赤鞘者被相詰候事、

一、御香奠三百疋白木台江入のせ御名札付御先詰御刀番江相渡、御寺ニ而御香奠者役僧江相渡候、

但、寛政十一年二者御役人江頼候趣、

一、当役者出家案内ニ而御拝殿後之間江相通、御刀番・御納戸・御次之

間江相通候、当役座付候处、煙草盆・御茶菓子出候事、

- 一、給仕之者ヲ以詰合御用人中江通御目申度旨申遣候、左候得者御座敷向も掛御目候間罷越候様申来、先方御用人詰所江罷越候事、

(17才)

- 一、先方御用人案内ニ而御座敷通拝見、何角手筈等申合、随而御刀番御納戸も呼御座敷通為見差図致置候事、

- 一、文化二丑年四月御仏詣之節、宗右膳太御先詰之節、詰所前段之通別聞二付、其節詰御用人切田辺江寛政十一年御仏之節小笠原吉弥御先詰罷越候处、各様御同間江相詰候由、然处此度者御別間之趣申聞候处、右二而者何角御不自由可有之間、別而改候趣二付、此方何之差支も無之、其方御支も無之候ハ、御同間改度候、左候へ者、何角之御申合ニも宜旨申向候处、任其意同間江相詰候事、

(17才) 文化四卯年ニも同間江相詰候事、

- 但、座席者辺次江着座之心得申聞候处、寛政年中右之趣ニ而も先年者御拝殿方後ニ致詰、寺社奉行御目付卜向合相詰候趣申聞、座上之様ニ候得共、差図之通相詰、文化四卯年ニ者寛政十一年之通勝木廂蔵次ニ座付、

- 一、遠見立者最早左衛門尉様御出之趣出家名申出、直ニ御玄關縁取向方左之方江相詰、寺社奉行・御目付者縁取両方江向合相詰、御用人者縁取正面江相詰居、直ニ御先立相勤候事、

(18才)

- 一、御刀者此方御刀番式台に相詰居「御刀取候事、但、先達而ハ先方御刀取之趣也、文化四年ニも此方御刀番取候

事、

- 一、聖寿寺者御式台向而左之方江詰居、御先立御用人奏者致候事、
- 一、御居間江御座付直ニ先方御給仕之者御手水差上、夫直ニ御拝殿江御出、此節当役御居間御拝殿掛板迄御先立御拝相済被遊、御引取候節も同所御居間御入口迄致先立候事、

- 文化四年ニ者申合之上御手水斗者此方御納戸聞取差上候事、
- 一、御拝相済御座付被遊候得者、先方御通之者御煙草盆・御茶并御菓子差上候事、

(18才)

- 一、右畢而詰合御役人并聖寿寺「御逢之儀相伺候事、
- 一、御逢之儀申達、聖寿寺ニ詰御役人御逢之儀人数書御目付差出候旨入御覽候而、直ニ差出、当役奏者大儀之旨御意有之、但、何連も帶刀且聖寿寺御用人・寺社奉行・御目付迄也、聖寿寺御逢者御敷居内江入外者不入也、聖寿寺者御逢人数書ニ者書出無之、且御役人之前ニ被遊御逢候事、

- 一、右相済何茂御請被申出、達御聴、
- 一、聖寿寺御昆布も不差上、此方も何も被下無之、
- 一、殿様御召料御半上下也、

(19才)

- 一、右相済御召替此方御納戸之者差上、御旅御装束ニ而御引取也、
- 一、御供揃相伺申達、先方江申達直ニ何連も御出立之筋之通向ニ相詰候事、
- 一、御先詰之当役御帰相済候得者、詰御役人江挨拶直ニ御仰二付、引取

乗駕致引取候事、

一、御拝前御納戸之者、

一、御下乗場者此度寛政十一年御下乗之通坂を上りつゝち坂 沓間半斗
手形ニ而御下乗被遊候、尤大膳大夫様も右之御場所之趣故、何辺大
膳大夫様 多少御引さかり御下乗被成度御意有之、右之心得ニ而

(19才) 御駕籠為附候事、

一、御拝殿ニ者御拝敷有之事、

一、此方御先詰左之通、

御用人沓人、

御刀番沓人、

御納戸沓人、

一、先方詰役人左之通、

御用人沓人、

寺社奉行沓人、

御目付沓人、

右御役方江斗御逢有之、

御給仕式人、

御徒目付沓人、

右之通相詰、

(20才) 右者文化二丑年四月御下向之節御仏詣当役宗右膳太御先詰相勤候節
之例之、

(20才) (21才) (聖寿寺大図絵図 省略)

(21才)

一、御玄関 御先立者先立御用人御帰共ニ先立御用人勤之、

一、御居間 御焼香之節者此方御用人御先立相勤候事、

〔付記〕 本史料の掲載については、八戸市立図書館より御許可を得た。

(たかはし・ひろし 宮内庁書陵部研究員)